紹介記事

東 森堂氏の作庭について

永 松 義 博*

A study on the gardens made by Mr. Shindoh Higashi

Yoshishiro NAGAMATSU

摘要：東森堂氏の代表的庭園について、庭園意匠の特徴を、みてみたものである。その多くは、伝統的庭園の形式であり、豪快な石組を基本とした作庭手法である。又、自然の風景から得たものを再現するところにも個性がみられ、不断の観察の細かな感受性もうかがわれる。

1. はじめに

東森堂氏（福岡県久留米市通町，1870年～1950年）は明治3年（1830年）生まれで、本名を未八といい、幼年姉の嫁入先である東丑五郎氏の養子となった（図－1）。

養父の東丑五郎氏は長崎市小島町，八剣神社の神官であった。丑五郎氏は生来、極めて剛胆で、若くして海外雄飛の志を立て、香港に渡り、同地で理髪を修業し、帰国するや、当時九州の商業の中心として股賑を誇っていた久留米市の通町9丁目に於て、近代的な理髪店を開き、市内の人気を集めたといわれる。

森堂氏も当初は家業を助け、同業組合を組織し、自ら十余年にわたって組合長を勤めた。森堂氏は生来、読書を好み、宮崎来城、内藤寒山などの詩人と親交があり、画人とも交際し、父の影響で茶道、盆栽、盆景にも励んだといわれる。森堂氏が造庭に興味をもったのが30歳の頃からで造庭に関する古文書を読破すると共に、盆景を利用し、造庭の基礎を作っていた。氏は、自然の風景こそ、其の師であるとし、耶馬溪、英彦山、雲仙などの景勝の地を廻り、感銘を受けたといわれる。

森堂氏によって築かれた庭園は数多いが、そのうち自らも満足した出来映えだとして記録されているものは、表－1の如くである。この中には、既に荒廃に帰したものもあるが、なお多くが保全されており、その作風を伝えている。表に見られる如く、殆ど九州全域にわたって築庭しているが、その他、兵庫、大阪等にも招かれ、築庭を行なっている。

昭和10年も過ぎ日本が戦争体制に入ってから、新たな作庭はなく、氏の技術を発揮することができなくなったまま終戦となり、日本の経済が未だ回復しない昭和25

図－1 東 森 堂 氏

表－1 東森堂氏の主な作庭

場	所	築庭様式
福岡県久留米市津福今町	高野邸	平庭 回遊式
" "	御井町 石橋邸	築山 半回遊式
" "	" 長門石邸	平庭 借景
" "	櫛原町 板波邸	築山 半回遊式
" "	野中町 氷室邸	平庭 借景
" "	山川町追分 富安邸	平庭 回遊式
" 浮羽郡田主丸町隈吉村邸	築山	
" 三瀬郡城島町 富安邸	平庭	回遊式
" 山門郡山川村野町松尾邸	平庭	
" 田川郡添田町 中島邸	築山	借景
" " " 柏村邸	平庭	借景
佐賀県西松浦郡曲川村蔵	大串邸	平庭 借景
" 藤津郡久間村志田	山下邸	築山 半回遊式
大分県日田市豆田	富安邸	平庭
" 杵築市	野上邸	平庭 借景
熊本県人吉市	岡村邸	平庭 借景

* 福岡県立久留米農芸高校

写真-1 稲生邸庭園

写真-2 稲生邸庭園

写真-3 高野邸庭園

写真-4 高野邸庭園

年3月19日、80歳の高齢で世を去った。

以下、現存する東森堂氏の代表的作庭の形態的特色について調査したものである。

2. 東氏の作庭

(1) 稲生邸(旧氷室邸)庭園(久留米市野中町)

久留米市野中町の住宅街に、ひときわ高い樹林にとり囲まれた一画が稲生邸である(写真-1, 写真-2)。枯木戸をくぐると、春日型の石灯籠が園路を導き、巨大な礼拝石がみられる。右に曲ると、広々とした園地が広がっている。

本邸は、はじめ、有馬藩家老、岸氏の別荘として築造され、その名称も五福亭と呼ばれていた。その後、高嶋氏に譲渡され、更に氷室氏の所有となり、現在は稲生氏が受け継いでいる。庭園は、東森堂氏が氷室虎吉氏の依頼によって、作庭したものである。

庭園面積約8,250㎡(約2,500坪)、池面積約1,650㎡(約500坪)で中島式林泉庭園の様式をとるが、東南の庭は書院造りの様式を取り入れた部分があり、手水鉢、沓脱石、飛石の庭園意匠をみることができる。

枯滝部分の築山から、後方のへせ畑、高良山(3,123m)を借景とする庭園様式であり、前方の露地庭と合わせて、庭内の主庭を構成している。

池庭には、北面に水門を設け、中島があり、沢飛石で

これを結び、舟遊びのための舟着場もある。

園内にはカエデをはじめビャクシン、カンなどの古株が点在するが、他方、植生上の変化がみられ、特にカエデの種苗松の若木が多く生育している。その他、園内の歴史を物語るように、モチの大木やモミ、カン、クス、又西側にはモウソウの竹株もみられる。

(2) 高野邸庭園(久留米市津福今町)

庭園は溪流を境として、東側の書院風庭園と、南側の茶庭(露地)園とからなる平庭に分けることができる。

書院風の庭は、左方に濡鷺型石灯籠、中央に善導寺型石灯籠と守護石、礼拝石の力強い石組、園内随所には松とカエデを植栽しており、特に赤松、アイグロ松の老松は、庭に風格をもたせている(写真-3)。又、三石の石組や沓脱石から庭内へは、大きな飛石を主とした書院庭であり、心良い感じを与えると共に、地面を被う杉苔のじゅうたんは見事である(写真-4)。書院脇の露地

写真—5 富安邸庭園

写真—6 富安邸庭園

写真—7 長門石邸庭園

写真—8 長門石邸庭園

には巨大な石の手水鉢を主景とし、笥のあともみられ、趣を添えている。

溪流を境として、右手に蹲踞手水鉢が据えられ、待合腰掛けと共に、茶のわび、さびの感を深める。

庭の周囲は、カイヅカイブキによる刈り込み生垣として、外界と遮断している。

老松、キリ、マンリョウ、あるいは石組の根締めとしてのサツキの丸刈り込みと、苔の美しさ、三尊石、石組、石灯笼と飛石など、作庭の基本をみることができる。

(3) 富安邸庭園（久留米市山川町）

久留米市山川町追分に、本庭園がある。本邸は高良山の北側にあたる場所にあり、北側に面して主庭となる。

庭の形態は回遊式の平庭であり、主となるのは赤松の林である。地被は杉苔だが、赤松自体も密植するという形ではなく、むしろ疎林といってよく、明るさに満ちている（写真—5、写真—6）。

通路は飛石を主体としており、奥行きをとった配置であり、庭の広さが感じられ、苔の美しい優美な書院庭である。

庭園の東面には、防空壕跡地を利用した、小高い築山の部分もみられる。

書院脇には、2組の縁先手水鉢がみられるが、いずれも巨大な石を用いており、豪壮である。全体に、サツキ、サカキ等の多くの刈込みと石組が意匠されている。書院

前3カ所からは優雅な沓脱石、飛石を配してあり、回遊する方式だが、座敷から巨松の隠見する景観も美しく、座視観賞を兼ねた庭園となっている。

庭園の中央には、巨大な礼拝石が配され、主景石も兼ねられており、付近には三尊石石組もみられる。又、正面左右には二神石（二主石、二柱石）の立石が配置されており、庭園構成の基本形をみることができる。

石灯笼は春日型、濡鷲型、道しるべ等6基が配されている。

樹種は、赤松の他、カエデ、マンリョウ、クロガネモチ、モチ、イヌマキ等である。

主庭の他に、奥の院の形の石灯笼とダイミョウチクの植え込みでまとめた中庭も、清楚な感じを受ける。

(4) 長門石邸庭園（久留米市御井町）

長門石邸庭園は、主邸は北側に面しているが、遠山と周囲の田園風景が展望でき、借景の景観を主とした明朗な庭園である（写真—7、写真—8）。

庭園様式は、縁先2カ所から大きな沓脱石、勾配のある飛石で庭に降りることができる、平庭回遊の形式をとっているが、座敷よりの眺望もよく、座観賞を兼ねたものである。

庭園西側部分は、書院風庭園であり、巨石を利用して、優雅な縁先手水鉢が設けてある。西側奥に、深山象徴の滝石を組み、南面に向かって水を引き、東西の小池

泉に落としており、流れを主体とした庭である。

溪流は、下流になるに従って幅が広くなり、池に注いでいるが、小石による州浜風の浅瀬もみられる。池泉の周囲には、サツキの大刈込み、ヒサカキ等の多くの刈込みがみられ、見事な景趣をつくっている。流れには、石橋の代りに、沢渡り石を2カ所に打っている。

庭園の左右には、小高い築山を設け、遠山との関連した景観で、雄大さを感じさせる効果がある。庭園のほぼ中央には、巨大な礼拝石が主景石として配されており、豪快な作風である。

石灯笼は、奥の院型等3基が据えられ、庭石とよく調和し、落ち着いた感じを与えている。

庭園材料は、イヌマキ、アカマツ、カエデ、ハゼ、クロガネモチ、サツキ、ヒサカキ、クマザサ等であり、地被は芝と苔である。

(5) 石橋邸庭園(水明荘)(久留米市御井町)

久留米市御井町、高良山登山口付近に、石橋氏の別荘として、東氏作庭の庭園、水明荘(石橋邸庭園)がある(写真-9)。

庭は、山間の起伏、自然の地形を巧みに利用し、回遊する形式をとっており、上部・中部、下部区のそれぞれの地に、特色ある庭園意匠をみることができる。

上部は、大池泉を中心とした、池泉観賞、回遊式の日本庭園様式であり、背後に山を負った雄大さを感じさせる、優雅な庭園である。池中には、ほぼ中央に巨大な平石を配した中島があり、全体を引きしめ、典雅で美しい。石上には、灯笼がみられる(写真-10)。

滝口は、南東部にあり、石を重ねて築き、落差のある石組である。さらに、ススキ、クマザサ類を配して、風趣に富んだ溪流を構成して、池泉に注ぐ形をとっている。谷川の水を引いた、清らかな池泉庭園である。

下部は、自然の美しさを生かした、芝生の明るい自然風景式の庭園で、イチョウ、ケヤキの大木、アカマツの老木等がみられ、洋館に合った、開放的な庭園様式である。現代風を代表する庭でしばしば賓客の接待に用いられている。東氏の近代感覚が、示されている庭といえよう。

広大な庭の中央部には、カエデの溪谷と小池泉が造られており、勾配のある地形に、石段が設けられている。

写真-9 石橋邸庭園

写真-10 石橋邸庭園

秋の紅葉時には、見事な景をみせる。

3. おわりに

東森堂氏の作庭になる、代表的庭園の一部について、その庭園意匠の特色を報告したが、その多くは、伝統的園の形式であり、豪快な石組を基本とした、作庭手法である。

又、自然の風景から得たものを再現するところにも、個性がみられ、不断の観察の細かな感受性もうかがわれる。

古典的庭園の数少ない地方としては、日本庭園の伝統を学ぶ上に、適切な作例といえよう。

(1986. 受付, 1987. 3. 14受理)